

ネリカ (NERICA: New Rice for Africa) 支援の概要

平成 18 年 8 月
外務省多国間協力課

1. ネリカとは何か

(1) 定義

ネリカ (NERICA) とは、高収量のアジア稲と病気・雑草に強いアフリカ稲を交配することにより開発された稲の総称である。国際農業研究協議グループ (CGIAR) 傘下の西アフリカ稲開発協会 (現アフリカ・ライス・センター) (WARDA) が 1994 年にアジア稲とアフリカ稲の交雑種の育成に初めて成功し、これまでに 18 系統が品種登録されている (「NERICA」の名称は 1999 年に決定)。

(2) 特長

ネリカは①生育期間が短い、②乾燥に強い、③病害虫に対する抵抗力があるなどの特長があり、総じて在来品種に比べ収量が高い。現在は畑地向けの稲 (陸稲) が中心であるが、水田向けのネリカ (水稻ネリカ) の開発も行われている。

2. ネリカ支援の意義

(1) サブサハラ・アフリカの食糧事情

サブサハラ・アフリカでは、近年、コメの消費が急速に伸びており、生産が需要に追いつかず、約 4 割を輸入に頼っている状況である。また、旱魃等の影響により稲作の生産性は低く、食糧安全保障の観点から生産性向上を通じたコメの増産が急務となっている。

(2) ネリカの有用性

アフリカの稲作は、主として貧困で小規模な農家により営まれる粗放的農業であり、灌漑整備や肥料の多投を行うことなく収量の増加が見込めるネリカを普及することにより、コメの増産、農民の所得向上を通じて農村の貧困削減に寄与することができる。

3. 我が国のネリカ支援

(1) 経緯

我が国は 1998 年のアフリカ開発会議 (TICAD II) で決定された「東京行動計画」における具体的支援策の一つとして、WARDA に対し、資金と技術協力をを行い、研究活動を支援することを表明した。その後、2002 年 8 月の持

続的開発のための世界サミット（WSSD）において、アフリカ農業開発支援の一環としてネリカの開発・普及促進を表明し、さらに 2003 年の TICADⅢでもネリカの普及促進支援を取り上げた。

2005 年には、G8 グレンイーグルズ・サミットに際し小泉総理より発表した「日本政府の対アフリカ開発支援」において、ネリカの開発・普及の推進を支援することを表明している。

（2）支援内容

（イ）研究開発

CGIAR 拠出金や UNDP 人造り基金を通じて、WARDA によるネリカの研究・開発に対する財政的支援を実施している。また、WARDA と我が国の農業研究機関との共同研究も行っている。

（ロ）普及

2004 年より、JICA 技術協力専門家 1 名をウガンダに派遣し、ネリカの栽培試験、種子生産、研修、東・南部アフリカ諸国への巡回指導等を実施している。ウガンダでは、JICA 専門家と我が国の NGO が協力して種子・肥料の配布、脱穀機の製造研修も実施している。

また、東・南部アフリカ諸国において JICA の支援によりネリカの品種適応化試験を実施するとともに、現地において稲作技術セミナーを開催している。さらに、JICA は 2006 年より、ネリカに関するアフリカ各国からの研修員受入事業（本邦研修）を実施している。

この他、2006 年より FAO を通じ、ウガンダにおけるネリカの普及・生産促進事業に 1 億 4,700 万円の貧困農民支援を実施している。

西アフリカでは、UNDP 人造り基金を通じてギニア、コートジボワール等において種子増産事業を支援したほか、2005 年より JICA 専門家 2 名を WARDA に派遣し、ネリカの効果的な普及を図るための国際的プラットフォームとして 2002 年に設立されたアフリカン・ライス・イニシアティブ（ARI）の活動を支援している。

（3）今後の取組方向

我が国は、まずウガンダとギニアの 2 か国において、ネリカ普及の成功事例を形成し、その成果を他の周辺国に拡げていく方針である。また、普及支援に当たっては、被援助国政府のオーナーシップを重視し、国際機関、他のドナー国、NGO と緊密に連携し、援助効果の向上を図ることとしている。

（了）